

1986年5月10日

## 初めての論文

中 村 司

「初めての論文を書いた時の苦心や喜び」

表記題名で直ぐに書いて欲しいという依頼があり、二つ返事はしたものの、さてどの論文が該当するだろうかと考えてみた。やはり懐かしく思い出されるのは大学の卒業論文であるとの結論を得たので30数年前の事ではあるが、思い出すまゝに綴ってみることにする。

旧制大学は3年制で卒論テーマは2年の後半に考えておく必要があった。先輩に相談すると、自分の好きなテーマが良いという意見と、好きなことは何れ自分でやるから、卒論は基礎なので教授の専門のことをやった方が勉強になる、という2つの意見に分れた。考えた末、私は前者に従い「鶏に及ぼす甲状腺ホルモンの影響」というテーマを選んだ。しかし、鶏を飼う場所が大学には無く、また下宿の身だったのでなすべくもなかった。幸い私の父がご親交を頂いた蜂須賀正氏博士を通して、山階芳麿博士にお願いし、大楠の先生の別邸の方で山階鳥類研究所の分室として、交配実験などをしておられるのでそこでお世話になることに定まった。甲府の養鶏所からひなを購入し、愛車で葉山の先にある大楠まで運び、ゲージを作ってひなを育てることになった。何一つ経験のない私であったが、山階先生や奥様が手をとって教えて下さった。先生ご自身、ハンティングにハンマーを持ってケージを作られ、動物学者はこのくらいのことでは自分でできなければいけないとさとされた時には、本当に心から敬服し、また感謝した次第である。頂度その頃先生は細胞学に基づく動物の分類(後の遺伝学会賞)を執筆しておられ、バリケンの交配実験などをしておられたが、私にとっては見るものすべて新しいもので大変得ることが多く充実した毎日であった。愈々データを揃え先生に見て頂いたところ、山階先生のご感想は、特にホルモンなどの影響を調べたりする場合は、経口にせよ注射にせよ必ず強い影響が現われるだけの量の投与をしないと比較が困難であるという、非常に基本的で重要なご意見を頂いたことを思い出す。実験は二度繰り返された。やがてあっという間に数ヶ月が過ぎ、いよいよ論文を書く段取りになった。田中義麿博士の論文の書き方を参考にして何度も書き直しやと序文、材料及び方法、論議、結論、文献と形を整えた。結局科学論文で大切なことは、良い論文を書くための周到綿密なプランを立て、労をおしまず努力して実験観察を行えば、書く時はそれらを順に追っていきさえすれば良いのであると強く感じたのである。邦文を書き終えてから、英文にしてみようと思い立ち早速始めてみたが、全体の三分の一もいかないうちに提出日が迫ったので英語と邦文のチャンポンのまゝ提出することにした。大学の指導教官は高槻俊一教授で貝の生理の権威者であったが、その都度報告を申し上げたので心よくご理解下さり讀辞とAを頂いた。初めての論文だけに嬉しさが込み上げるのを禁じ得なかった。

実質ご指導頂いた山階先生と、好きな事をさせて下さった亡き高槻先生に感謝申し上げる次第である。今は学生の卒論指導に当たる立場だが、昔の自分のことを考え、学生と相談しながらテーマを決めている。

## 論文のまとめ方

研究の結果をまとめ、それを論文として発表することは、研究を行う上で非常に大切なプロセスのひとつですが、同時にとてもしんどい作業でもあります。

一昨年、鳥学会三重大会でのシンポジウム「これからの日本の鳥学」に先立ち、鳥学会会員200人に対してアンケートを行いました。その結果わかったのは、多くの会員が実際にテーマを決めて鳥の観察、研究を行っているにもかかわらず、それをまとめて論文として発表している人がとても少ないことでした。論文を書かない理由の多くは、まとめの時間が取れないというものでしたが、なかには、論文や図表の書き方がわからないといった技術的な理由から、せっかくのデータを論文にしていない人が多くいました。

そこで今回は、論文を書く上でちょっとしたコツや、経験談、苦労話を、何人かの研究者に書いていただきました。自分の研究をまとめて論文を書こうと考えている方々の参考になれば幸いです。

昨年、信州大学で開かれた鳥学会大会でも、非職業研究者による立派な発表が数多く見られました。あのような研究の多くが論文として発表されるようになれば、日本の鳥類学もさらに発展するに間違いありません。多くの人が論文を発表して、『日本鳥学会誌』がいつの日か、『Auk』や『Ibis』のような分厚い雑誌になることを期待したいと思います。(百瀬 浩)

論文を書くうえで

苦労したこと

伊藤 信義

はじめて論文を書いたのは戦時中のことで、片カナまじりの文語体であった。その戦後の幾度かの表記法改正に遇いながら、医学の論文40篇余と単行本3冊をものにしてきた。“医学者は一般に論文の書き方が下手だ”とはよく聞かされる批判であるが、事実この領域では査読制度の採用もずいぶん遅れていた。加えて、私の研究は独自のもので、校閲も名のみであった。かねて、論文のまとめ方について心をとめていた私が頼みとしたのは、田中義麿：科学論文の書き方と、発刊されたばかりの畠田軍二：科学論文のまとめ方書き方(当時、これらの本があることさえ知らない者が多かった)であった。このたび“鳥”の原稿をまとめるにあたり、この2者の最新版を手にして、すでに30-40回も刷を重ねることに、論文を書く人の数とその関心のほどを想い、今昔の感に堪えないものがあつた。

さて、論文を書く上で“苦労したこと”という題を与えられたが、私の場合はむしろ“校閲者に対して如何に苦勞をかけたか”と題し

の方が適切だとさえ思うのである。論文はいつもの如く方法・論議から始めて次に緒言という順にまとめたのであったが、その原稿に目をとおされた先生は先ず“難解だ”と評された。そして、長い原稿をばっさり切つて2篇とし、図や表を作りなおすよう命ぜられた。けっきょく残つたのは、データと骨組みだけとなつてしまつた。いわれたとおりに図・表をつくりなおしているうちに、考察の筋も自然とつかめていった。その考察に対してもすみずみまで批判を加え、さらに一字一句もかりそめにしない姿勢を教えられた。あるいはけなし、あるいはいゝ気持ちにさせられる校閲者との間を再三・再四往復する原稿にいっぱい朱が入つて届く度に、未だこれほどに手をとってもらつたことのない私は感奮した。徹底的な文字通りの添削により拙い原稿が徐々に批判に耐える姿になつてゆくことはいゝような喜びであり、はじめて“原稿を書いたな”という気分を味わわせてもらったのである。

もし、このように熱心で優れた指導者と膝を交えて計画を練り、結果をまとめるのであ

れば、データの割愛や調査のやりなおしなどは起らないであろう。しかし、その幸運に恵まれない多くのアマチュア研究者が論文を書くときは、まず学会発表によってPriorityを確保し、また批判をうけることにしたい。そして、原稿書きには十分に時日をかけ、読む人の身になって練り直し、“必ず熟させながら”じっくりとまとめ、さらに友人にも目を通してもらうなどして推敲を重ね、それから校閲をうけることにしたい。これで論文を書く“苦勞”もおいおいと“楽しみ”となってゆくものと信ずる。いやしくも研究に志すほどの者は、謙虚・純真・素直な心で教えを乞う心構えが第一だというのが、私の信条である。

論文を書く前に

上田 恵介

論文を書き始めてまだ数年の私が、こんな大それたタイトルで書かねばならぬ破目になってしまったが、自分自身の経験から、これから論文を書こうとする人に何らかの参考になればと思い、いくつか気づいた点を述べてみたい。

① 英語で書くか、日本語で書くか

さて論文を書こうと思う人が、まず悩むのはこの点である。日本語で書く方が簡単なことは言うまでもないが、なんとなく英語の方が「カッコいい」し、他人の評価も違ってくるような気がして、「ああ、自分が英語圏の国に生まれていたらなあ」と思う人も多いと思う。

しかし、要は中味の問題であって、つまらぬ内容を英語で書くより、良い内容を日本語で書いた方がはるかに良いと思う。日本人の研究者にとって、英語の論文を読むのはやっぱり面倒である。けれど日本語で「鳥」や「山階鳥研報」や「日本生態学会誌」などに掲載された論文は、日本のほとんどの鳥の研究者は目を通してくれる筈であるし、引用率も高い。さらに現在では「Auk」と「Ibis」の共同の付録として世界の鳥類学関係の論文抄録が年4回発行されているので、それらが海

外の研究者の目にとまることも多く、別刷の請求も少なからず来る。

今はまだ研究者の数に比して、これらの雑誌に載る日本語論文の数は少ないが、これが増えれば日本の鳥学のレベルの向上にも役立つし、鳥学者の交流もさかになると思われる。特に大学や研究機関におられる中堅以上の研究者の方々が、よい論文を日本語でどんどん国内誌に投稿されることを、若手を代表してお願いしたい。

しかし、まだ職を得ていない院生等の若手研究者の場合は多少の苦勞はあっても、英語で書くべきであろう。ひとつにはこれから研究者をめざす者は世界的なレベルで“勝負”してもらいたいということ、もうひとつは、つまらぬことだが、就職の際の業績評価には、必ず英語論文の本数が入ってくるからである。

② 表がよいか図がよいか

迷う点である。読む者の立場からすれば、明らかに図の方がみやすい。しかし図にもりこめる情報量はどうしても限られてくるので、サンプルサイズや有意差やもとのデータを知りたい時には詳しい表があったらなあと思う。

一般的には日周性や季節変動など、動的なものを表わすには図の方がよく、一腹卵数や繁殖成功率のデータを比較するときは表の方がよいだろう。もちろんなわばりや行動圏など、図でしか表わせないものもある。それから表で述べたのと同じことを図にしてはならない。そしてわざわざ表にしなくても本文中で述べられることは表にする必要はない。ついでに図や表はかなりの印刷経費がかかるものであるから、自己負担するのでない限り、必要最小限にとどめるのが投稿者のマナーであろう。

③ 平均値ばかりが大切ではない。

ついつい安易に平均値を計算してしまうくせが研究者にはあるが、たとえば巢内のヒナが捕食者にやられる時など、死亡は All or None 式におこる。ヒナ数5羽の巢が10個あって、その半分が捕食者にやられたとき、[平

均巢立ちヒナ数は2.5羽です」というのは余り意味がない。平均値はサンプルの分布が正規分布に近いときに意味をもつ。場合によってはメジアン(中央値)やモード(最頻値)を用いた方がよい場合もあろうし、平均値からはなれ数値が本当は大きな意味をもっていることだってあるのである。

自分のデータを慎重に吟味して、それをどう表現すれば、言いたいことが読者に伝わるか、どう表現すれば“おもしろい”か、論文を書くものにはサービス精神も必要である。内容のまづさを難解さでごまかそうとしてはならない。本当によい論文は、誰が読んでもすっきりしていて、おもしろいものである。

#### 参考文献の探し方、 集め方

浦野栄一郎

論文をまとめる際には、関連する文献を読むことが必要となる。文献を読むことは、自身の研究の学問的位置づけを明らかにする上で重要な作業である。先人の業績を尊重し、何がその論文の新知見なのかを読者に判り易く示すためにも、文献は公平かつ正確に引用しなければならない。

しかし、自分の研究と関連する多くの文献を探し出し、手に入れることは、研究機関に所属する専門家を除いては、容易なことではない。

#### 〔芋づる式検索法〕

文献の探し方として最もオーソドックスなのは、1つの論文の引用文献の中から必要と思われる論文を選び出し、更にそれらの文献表の中から…と芋づる式に手繰っていく方法である。この方法では、種芋(最初の論文)をどう探し出すか、がポイントとなる。その際、参考になりそうな文献を以下に紹介する。

最近では文献表の充実した鳥類学や動物生態学・行動学の論文集や教科書が数多く出版されている(例えば、森岡他編, 1984.「現代の鳥類学」朝倉書店。 樋口広芳, 1978.「鳥の生態と進化」思索社。 クレブス・ディビス(城田・上田・山岸訳), 1984.「行動生

態学を学ぶ人に」蒼樹書房。)。特に黒田長久, 1982.「鳥類生態学」出版科学総合研究所。には136頁に及ぶ文献表が付いている。

山階鳥研報15巻1号(1983年)には第7巻('73年)から第14巻('82年)までの総目次が載っている。また鳥学会では会誌「鳥」の総索引作りが進められている。

いささか趣は異なるが、日本野鳥の会研究報告“Strix”には毎巻、雑録として寄贈・購入文献のリストが載っている。新しい文献が多く、また一般には入手しにくい地方出版物や官公庁発行の委託調査報告書がかなり集められている点で、利用価値は高い(残念なことに記述法が一般的でなく、誤植も散見されるので、注意が必要である)。

検索の手掛りとする論文としては、できるだけ新しいもの、総説的なものが望ましい。新しいもの程、引用されている文献にも新しいものが含まれている(当たり前!)。総説はそのテーマに関する重要な論文が網羅的に引用されているし、何より、自分のテーマに関する研究史や問題点を知る上で格好の指針となる。

手持ちの資料からは、手掛りとする論文が見つけれない場合には、その分野に詳しい人に教えを請うのが良い。学会の大会や例会、地区懇談会(特に懇親会)は、つてを得る絶好の場だ。有名な先生方は恐れ多くて、という人は、大学院生クラスに相談するのが良いだろう。(現在、各地の院生が協力して、コンピューターを利用した文献情報の管理作業を進めている。詳しくは鳥学ニュース 16 p.6を参照されたい。)

#### 〔入手法: コピーの依頼〕

読むべき文献は判ったけれど、どうやって手に入れたら良いのか? このような人のために、鳥学会事務局や山階鳥類研究所では、文献複写の依頼に応じている。いずれの場合も、希望する論文の著者名・発行年・表題・雑誌名・巻(号)頁をハガキに書いて申し込むと、コピーが郵送され、同時に代金(コピ

一代+送料実費)が請求される。コピー代金は1枚当り、鳥学会25円、山階鳥研は一般100円、学生50円。山階鳥研の方は、枚数が多い場合には割引もあるとのことなので、直接、同研究所資料室へ問い合わせられたい(鳥学会への請求法については鳥学ニュース 16.p.9 参照)。

なお、鳥学会に請求する場合は、希望する論文の載っている雑誌が学会にあるかどうかを必ず確認すること(鳥学ニュース 15.p.12-13「外国交換雑誌について」参照。欠号もあるので注意!)。また山階鳥研の所蔵図書については、蔵書目録が発行されている。

この他、国立大学の図書館に依頼すると、他大学の蔵書(目的の雑誌の所蔵先も検索してもらえらる)のコピーを取り寄せることができる。ただし大学関係者以外の利用には制限がある場合が多いので、各大学の図書館利用規定を確認されたい。

上記の機関または個人に依頼する際に注意すべき点として(1)該当論文の書誌要素を省略せず、正確に記すこと(2)時間の余裕をみること(3)支払いは指定の方法で速やかに行うこと、が挙げられる。(1)の手間を惜しんだために不完全なコピーを受け取り、再請求する、という事態は、依頼者の金銭的・時間的損失となるだけでなく、依頼先の担当者に多大の迷惑をかけることになる。指定された文献を渡し出してコピーをとり、郵送する、という作業は想像以上に時間がかかり体力を使うものであることを、依頼する側は忘れてはならない。

(文献情報の検索・コピーの提供を業務とする機関・業者もあるようだが今回は割愛した。興味のある方は別項で紹介してある田中(1982)を参照して頂きたい)。

#### 修正を要求された時の対応

山岸 哲

今号の「特集ページ」の編集をまかせられた若手の院生・ODから表記のタイトルについて私に書けとの指令がきた。考えてみ

ると、「お前が一番、修正を要求された経験があるだろうから、その経験を書け」(考えてみなくともそうなのだが)ということなのだろう。役に立つかどうか心もとないが思いつくまゝら列する。

まず、修正要求を見ると私の経験では頭が血がカッとのぼるのが普通だ。頭に血がのぼると大抵は適正な判断ができにくくなるので、しばらくそれは放って別の仕事をし、冷却期間を置いてみる。再度取り組むときにはかなりレフリーの言うことが理解できる(大抵は的を射ていることが多い)。指摘されたことに謙虚に耳を傾けることができる態度が自分の論文をみがき上げる重要な点になるだろう。

全く逆のことを言うようだが、充分冷却期間をおいても、まだ自分で納得のいかない時には安易な妥協はしないことが肝要である。自分の考えをていねいに書いて、「これこれこうだから、私はレフリーの指摘には従えない」と正直に言うべきである。レフリーがとんでもない誤解をしていることもあり得るのだから。

概して、修正要求に従って論文が前より悪くなったという例は、まず私の経験ではなかったように記憶する。1にも2にも、頭を冷やすことだ。どんないい論文でも2~3回の修正は受けているのが普通なのである。

次に、今度は修正を要求する者の立場からひと言つけ加えておきたい。レフリーは皆忙しい中を、他人の論文にかなりの精力をかけて読み、かつコメントを入れるわけだが、この仕事はむくわれるのは、当該の論文が錫の目を見たときである。少し、悪い所を指摘された位で、その論文の修正再投稿を著者にあきらめられてしまったのでは、何のために大切な時間をさいて校閲したのかわからなくなってしまふ(もちろんその論文が修正すれば掲載可能である場合だが)。また、鳥学の進展のためにもおいしいことである。この点で少しアキラメの早すぎる方が鳥学会々員のなかにはおられる気がするがいかかであろう。

最後に投稿規定に合わない論文が送られて

ることがある。これはもう修正以前の問題であって、ここまでレフリーに修正させるのは大変失礼なことである。普通はレフリーにまわる前の事務受付の段階で返送されてしまう。投稿する前にもう一度、投稿規定を読み直して欲しい。

### 「論文の書き方」

文献案内

浦野栄一郎

今回の特集のために書店へ行って見て、「論文の書き方」「レポートのまとめ方」といった題名の本の多いことに、改めて気づいた。これらの本を一通り調べて要領良く紹介することは、私の能力に余ることなので、本稿では、私自身あるいは私の周辺の人が使っている何冊かの本を紹介するに留めたい。

1) 木下是雄, 1981. 「理科系の作文技術」中公文庫 624. 480 円. 本書が対象とする理科系の仕事の文書(手紙, 所属機関内の報告書類, 仕様書, 学生のレポート, 論文, 解説書等)とは「情報と意見だけの伝達を使命とするといってもいい」という, 著者の主張が全編に強く打ち出されている。

11章からなり, 1~8章前半では, 常に念頭に置くべき心構えについて語られ, 8章後半以後は, かなり具体的なマニュアルとなっている。私は本書を辞書と共に研究室の机の上に置き, 随時参照しているが, そのような時に開くのは, もっぱら後半の章である。しかし, 時たま前半を読み返すと, ハッとさせられることが多い。11章「学会講演の要領」は言わば付録であるが, 私には最も参考になっ

た。

2) 田中義麿・田中潔, 1959. 「科学論文の書き方」裳華房, 3700 円. 伊藤信義さんの文中にも登場する, 類書のパイオニア的存在で, 現在は増補第 31 版が書店に並んでいる。

3) 田中潔, 1982. 「手ぎわよい科学論文の仕上げ方」共立出版, 1800 円. 著者自身によれば, 前掲書が「正統派的, 古典的な風格を備えているとすれば, 本書は重点的, 現代的という特徴を持つ」(序言より)。実際, 2) と比べて, 具体的, 技術的な面に重点が置かれている。4章「表と図」, 6章「印刷と校正」では, 論文を書く側が心得ておくべき印刷技術について紹介されており, 私には参考になった。製図用品等についても詳しい。

以上, 主として日本語論文を書くための参考書を紹介してきたが, 英語と日本語の文章表現の違いを除けば(と言っても, この違いが書く方にとっては非常に大きいのだが…), 論文の書き方は共通である。その意味で, 数多く出版されている「英語論文の書き方」といった本も参考になる。

初めにお断りしたように, 今回紹介したのは類書の中のごく一部であり, ここで取り上げなかった中にも良い本は沢山あることと思う。どの本にもそれぞれの特徴があり, 各人が実際に手に取って見て, 自分が使い易そうなものを選ぶのが, 一番良いと思う。本稿がその際の一つの目安にでもなれば幸いである。

### 会誌名の変更・原稿募集

創刊以来親しまれていた「鳥」の誌名が, 本年度から「日本鳥学会誌 Japanese Journal of Ornithology」と変更になります。これは本誌 15 巻の Discussion 面の主旨にのっとり決定されたもので, より国際的な学会誌としての第一歩となります。競ってご投稿下さい。なお送り先は下記に変更になりました。〒079-01 北海道美幌市光珠内 専修大学北海道短期大学

正富 宏之 宛 (電話) 01266-3-4321

## 日本鳥類標識協会 創立される！

茂田良光

本年2月9日(日)、山階鳥類研究所において日本鳥類標識協会創立総会が開催された。これは昨年8月17日に山階鳥類研究所標識研究室(室長:吉井正)が中心となって同協会の設立準備委員会が結成され、その後の準備委員会の討議を経て開催の運びとなったものである。総会は全国から60名近くが参集し、盛況であった。

総会では参加者全員の賛成のもとに日本鳥類標識協会が設立され、会長:黒田長久、副会長:吉井正、をはじめ評議員やその他の役員、会則が承認された。当日の午後は約1時間の意見交換の後、黒田長久:鳥類標識の意義、吉井正:アジア地域における鳥類標識、と題する記念講演があり、続いて短報として風間辰夫:鳥類標識による新潟県の新記録種、長谷川博:アホウドリの標識研究、の報告があった。

翌2月10・11日の両日には、千葉県香取郡東庄町笹川と銚子港でそれぞれ、標識調査と探鳥会のエキスカッションが開催され、参加者41名でこちらも盛況であった。10日には笹川でオオセッカ7羽が標識放鳥されたが、そのうちの1羽は昨年8月18日青森県三沢市仏沼にて放鳥された幼鳥であった。

同協会の活動内容には、(1)会誌の発行 (2)研究会等の開催 (3)マニュアル・技術書の発行 (4)協同調査 (5)外国標識機関との交流、等が掲げられており、財源は会費・寄付金・その他の収入があげられる。会誌の内容は、標識調査による調査・研究、各地の標識調査状況、識別・標識技術に関する報文、文献紹介、情報交換、等でB5版年3回発行の予定である。

同協会の会費は正会員・協力会員年額3,000円(賛助会費年額10,000円)で、鳥類標識調査を行っていない人でも入会できる。なお入会の申し込みや問い合わせは、下記宛

〒270-11 千葉県我孫子市高野山字堤根115 山階鳥類研究所内  
日本鳥類標識協会 (電話 0471-82-1108)



日本鳥類標識協会創立総会(山階鳥類研究所講堂にて '86. 2. 9)

## 近畿地区懇談会 1985年度活動報告

昨年度は下記の3回の例会を兵庫、大阪、京都で行いました。

—第23回例会—1985年3月17日(日)伊丹市立博物館(兵庫)

1. 淡路島のシロチドリ(山崎 博道氏)
2. 三重県のシロチドリ(樋口 行雄氏)

3. シロチドリのかなわばりとつがい形成(平松 山治氏)
4. カイツブリのかなわばり制(大空 はるみ氏)
5. 鳥の網膜の着色油球について(権藤 真禎氏)
6. 1984年度活動報告, 会計報告 参加26名

—第24回例会— 1985年7月27日(土) 大阪市大文化交流センター(大阪)

1. 京都におけるアオバズクの生態(富田 良雄氏)
  2. 北ボルネオの鳥のさえずり—森林の鳥の音響生態学—(百瀬 浩氏)
  3. 琵琶湖東岸におけるサンカノゴイの繁殖本邦初確認と今後の問題(前田 崇雄氏)
- 参加20名

—第25回例会— 1985年12月8日(日) 東山会館(京都)

1. カワガラスの食性(小藤 弘美氏)
2. カワガラスのねぐら行動(橋口 大介氏)
3. カワガラスの営巣について(藤井 格氏) 参加16名

近畿地区懇談会は年会費500円です。近畿地方在住の鳥学会会員の方の御参加を歓迎します。また鳥学会会員以外の方々の参加も認めています。今年の4月から事務局が兵庫(〒664伊丹市桜ヶ丘5-2-6 坂根隆治方)へ移りました。

(山岸哲, 上田恵介)

## 読者の情報コーナー

- コシアカツバメの繁殖分布を調べています

ツバメ類の繁殖分布調査を行なっています。なかでもコシアカツバメについて、増減の傾向、営巣場所の選択、他種との関係等に関心を持っています。そこで、他の地域での状況

や西南日本と東北日本の違いを知りたいと考えています。

会員諸氏のフィールドでは、いかがでしょうか。何か情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ御一報お願いします。

〒710 岡山県倉敷市中央2-6-1

倉敷市立自然史博物館 江田 伸司 宛

## Information

### 新刊書ニュース

#### 続々・ICBPの専門書

ICBPから発行されている専門書シリーズのひとつとして、ワシタカ類の保護研究についての本が出版されました(本誌16号7頁17号6頁参照)。

Newton, I. & Chamcellor, R. D.(ed)  
1985. Conservation Studies of Raptors.  
492 pp. ICBP Technical Publication /

ノNo. 5. ICBP.

1982年にギリシャのテサロニキで催された第2回ワシタカ類世界会議の成果をまとめ、ハゲワシ類研究集会の報告をも含めています。特に地中海地方のワシタカ類の窮状を報告・討議し、そのほかに熱帯林に生息するワシタカ類、ワシタカ類の渡り研究、ハヤブサ研究をとりあげ、さらに保護管理をも論じています。送料(船便)こみで25.5ポンド(約7,000円)鳥学会でまとめて注文します。希望者は葉書で連絡して下さい(代金後払い)。前号までに紹介した本の注文も受けます。約2か月で届きます。宛先 長谷川博。

#### 【出版物案内】

1) 山階鳥類研究所標識研究室(編). 1985.  
「日本の鳥類標識調査(昭和36年~昭和58

ノ年)」8+202頁. 山階鳥類研究所.

戦後、鳥類標識調査が再開されてから1983年までの調査の成果をまとめている。特に、



標識鳥の回収データを一目でわかるように地図で示して有益。

2) Campbell, B. & Lack, E. (ed) 1985. A Dictionary of Birds. 30+670 pp. T. & A. D. Poyser, Calton U. K. 39 ポンド。

イギリス鳥学会が世界各地で活躍している

280人の研究者・専門家に執筆を依頼して編集した「鳥学事典」。A4判よりわずかに小さいだけの大判の本。それだけに持ち運び不便。1冊購入して必要な時に見ることができるようしておくとういだろう。

#### 樋口広芳氏、アメリカへ留学

幹事・評議員の樋口広芳さんが、1年間の予定で、ミシガン大学へ留学されました。現地ではスペイン留学中の奥様と合流されるとか。はたして1年で帰国するか否か、巷ではひそかにカケが行なわれているふしがあります。それはともかく本誌ではアメリカの鳥学の現状をレポートしていただく予定です。乞ご期待!

#### 会員のためのニュースレター

本誌は会員のための実用記事、学会からの連絡の他、会員自身が利用していただく「交流の場」も兼ねています。とくに「読者の情報コーナー」は自由に使える紙面です。情報・資料の収集への協力依頼、図書や文献の探索と交換、レンズ・ビデオの売買など何でも結構です。ただし責任は投稿者で負って下さい。原稿の送り先はニュース編集部。

### 千葉で会いましょう 1986年度大会の案内

三重、長野と続いた大会は、今年、千葉の習志野で開催されます(大会通知同封)。

時 1986年9月13(土)、14(日)

場所 東邦大学習志野キャンパス(千葉県船橋市三山)

例年と同じく、一般講演、ポスター発表、シンポジウム、フィルム(VTR)発表を募集します。昨年度の大会ではポスター発表が少なく、スライドを用いる一般講演に集中したため、プログラム編成がきゅうくつになり、聞きたい発表をきけなかった人もでてしまったようです(「ニュース」18号6頁参照)。

その反省から、今年はポスター発表を積極的に申し込んでほしいと思います。それに適した会場とポスター作成に必要な用品を用意します。また、最近普及しているVTR発表をも歓迎します(ただし簡潔にまとめたものに限ります)。

シンポジウムのテーマは、「都市環境に生息する鳥類の生態」で、都市鳥研究会の研究成果が発表される予定です。話題提供を希望する人は、世話人の唐沢孝一、川内博両氏と連絡をとって下さい。エクスカージョンは行ないませんが、干潟の鳥類を観察するのに適した場所に案内します。

今年の6月には4年に1度の国際鳥学会議がカナダで開催され、それに付随してICBPの世界会議も開かれます。これらに参加する会員もかなり多く、いろいろな土産話が披露されるにちがいありません。

(長谷川 博、〒274 千葉県船橋市三山、東邦大・理・生物)

電話 0474-72-1141 内線353)



小学館

# 鳥のさえざり、 羽ばたきが聞こえてくる。 小学館の野鳥の本。

## 和田剛一写真集 野鳥讃歌

定価3,800円

小学館の学習百科図鑑

4 鳥類の図鑑

黒田長久・菅野伸二 共編 定価1,080円

34 野鳥の観察 菅野伸二 定価1,200円

小学館自然観察シリーズ

7 日本の野鳥

菅野伸二 定価980円

20 バードウォッチング

菅野伸二 定価980円

23 まちのバードウォッチング

竹下信雄 定価980円

好評発売中

### <長野大会の記念写真をおわけします>

昨年度の長野での大会時の記念写真(約9×13cm)とエキスカッション時の写真を、1枚120円(送料込み)でおわけします。希望者は長谷川博(住所は前頁)まで申し込んで下さい。(切手可)

### <鳥学ニュースの広告について>

本ニュースレターでは「広告」を掲載しています。発行部数は約1,100部ですが、レベルの高い会員対象ですので、宣伝効果は高いはず。会員の方で関係された書籍・レコード・機器などありましたら、本誌に広告を載せるようお勧め下さい。申し込み・連絡先はニュース編集部です。

~~~~~  
ニュース編集部  
~~~~~

〒112 東京都文京区大塚5-40-10 (電話) 03(943)2161

日本大学豊山高校 川内 博 宛

### 編集後記

ダブル・博で編集を引き受けて、早3年がたってしまいました。種々に工夫を凝らしたつもりですが、まだまだ軌道にのりきれない面があり残念です。とくに会員が「利用」という趣旨が主かされていない点が、編集者としては力不足を感じています。

ところで、今回の特集は近畿地区在住の会員によって組んでもらいました。感謝いたします。これからも年に1回程度は、東京以外の地域で特集を考えてもらう予定です。(川内)

## 鳥学ニュース No. 19

1986年5月10日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1  
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599  
(電話) 03(364)2311 印刷所 文英社印刷  
発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博